

三月のテーマ

お金と倫理



え・城谷俊也

迷った時の判断基準

生

活や仕事の様々な場面で、私たちは選択を迫られます。いくつかの選択肢から一つに絞ることは容易ではありませんが、そこに金銭が絡むと、選択はさらに困難を極めます。

的確な選択につながる判断基準はないものでしょうか。

生花店を営むA氏は、地域の学校のPTA会長も務めています。例年、卒業式が近づくと、式に飾る花の注文が学校からあるのですが、その年はありませんでした。

春に赴任した新しい教頭先生は、周囲への気配りに欠けることを時折耳にしていました。〈例年の慣例を無視して、他店に注文したのでは?〉と疑うようになったA氏。〈学校のことをよく知っている自分の選んだ花を卒業生に贈りたい。学校運営には気配りが大切だと忠告すべきだろうか〉と迷ったA氏は、倫理指導を受けました。

講師に胸中を明かすと、「あなたにとつて、ご自分のお店の花が飾られた卒業式と、同業他社の花が飾られた卒業式に参加すること、

どちらが難しいですか」という言葉が返ってきました。「もちろん、他社の花がある式に参加する方が難しいです」と答えたA氏。すると、「難(かた)きを選べ」という言葉があります。迷った時は、難しく感じる方を選んではいかがですか」との指導を受けたのです。

「難きを選べ」という言葉に、氏は〈教頭先生や生徒のためにと思っていたものの、本当にそうだろうか〉と自問しました。自分を無下にする教頭先生の態度と、予定していた儲けがなくなるという損得勘定から、責め心が生じていたことに気づいたのです。〈今回はどこの花が飾ってあるかと、卒業生のためになる行動をとろう〉と決心したのでした。

その日の夕方、学校の先生から一本の電話が入りました。それは「花の注文担当になっていたものの、失念し、連絡が遅れました」という注文の電話だったのです。

*

丸山敏雄は著書『作歌の書』において次のように述べました。

「われらが新しい道に進む最も正しい行き方は、常に難きを選ぶこと、大物にぶつかることである」

誤った選択の根底には、我欲が働いています。「難きを選ぶ」選択は、我欲を出さない行為につながります。そして、金銭は、我欲なきところに集まる性質を有しているのです。

また、自身の役割を全うする時に求められるのは、「誰のためか」という視点です。卒業式は、卒業生のために行なわれます。A氏の例では、次の中で、どの行動が卒業生のためになるでしょうか。

①自社の花が飾られているが、氏と教頭先生は責め合っている。②他店の花が飾られ、いやいや出席(もしくは欠席)。③他店の花が飾られているが、氏は喜んで出席。

たとえ注文が来なくとも、③を選択した時、氏は更なる信頼を得られるでしょう。選択という行為は、判断次第で、自身の成長につながることでできるものです。A氏にとつて、その年の卒業式は、忘れ難いものとなりました。